横浜市史資料室　City of Yokohama Municipal Archives Reference Room

市史通信

【目次】
●大正後期～昭和前期、学校写真の世界 ―岡野小学校の写真資料を中心に―
●続・戦後の風景
●一九一六年、山室周作家のナス生産と出荷
●資料紹介
●市史資料室たより

岡野小学校の入学式（年不詳、1929～1937年）
教育・学校資料写真031-001

第39号
【発行日】2020年11月30日
【編集・発行】横浜市史資料室
〒220-0032
横浜市西区老松町1番地
横浜市中央図書館・地下1階
【電話】045-251-3260
【FAX】045-251-7321
【E-mail】
so-sisiriyou@city.yokohama.jp
【ホームページ】
https://www.city.yokohama.lg.jp/city-info/yokohamashi/gaiyo/shishiryo/

大正後期～昭和前期、学校写真の世界
―岡野小学校の写真資料を中心に―

はじめに

三年後の二〇二三年は学制施行から一五〇周年を迎える年であり、横浜市内でも約三〇の小学校が創立一五〇周年を迎えることになる。そのためこの年に向けて学校・教育関係資料を再整理し、より広く市民の利用に供するための準備を進めている。今回はその一環として目録を作成中の「教育・学校資料写真」のうち、岡野小学校の写真資料を紹介し、そこから何を読み取ることができるかを整理してみたい。

写真というメディアは、対象となる人や物の姿を周囲の風景と共に記録する。撮影者のアングルやポジション、ピントのとりかた等にも注意が必要ではあるが、写真はその時・その場にあるものを視覚的に記録し、見る人の感情に働きかける機能をもつ資料である。とりわけ学生時代の写真の数々は、友人と遊んだり学校行事に励んだ楽しい思い出にせよ、また先生に叱られたり受験競争やいじめ等に苦しんだ記憶にせよ、それを見る人に過去を回顧させ、当時の感情を呼びさますものとなる。そしてそれだけに、多くの人が大切に保存してきた歴史資料でもあるだろう。学校写真はこのような性格をもつ歴史資料であることをふまえつつ、そのありましをみていこう。

一、岡野小学校の沿革とその特徴

岡野小学校は一九二〇年一一月二〇日に尋常高等小学校として創立し、近隣の尋常西平沼小学校から五〇八名、宮谷小学校から六二二名の転校生徒を受けいれて授業を開始した（『開校一周年』、一九二一年、岡野小学校資料一）。そして一九四七年に校舎が新制中学校として転用され、初等学校としては廃校となった（『横浜市学校沿革史』、四七〇頁）。大正期横浜の人口急増を背景に開校し、戦後直後まで継続した学校であり、小学校としての存続期間は二七年と短いがその歩みには震災や戦災などの横浜の歴史が確かに根付いている。

岡野小学校資料は、二〇一八年に岡野中学校から移管された合計七四件の資料群であり、このうち四三件が写真帳やアルバム等の写真資料で表紙を含めて合計五九一枚の画像資料を採録できた。冒頭の写真もその一枚で、講堂に整列する新入生の後方に大人達がぎっしりとつめかけている。子どもの学びを支える保護者や地域の方々の熱意あふれる雰囲気が伝わってくるような写真である。

また岡野小学校は毎年一一月に学校記録を作成しており、一九二〇年度から三九年度までの合計十七冊の記録文書が現存している。ここから写真の内容を他資料から検証することも可能である。今回は代表的な写真から、大正後期～昭和前期の小学校の世界をみていきたい。

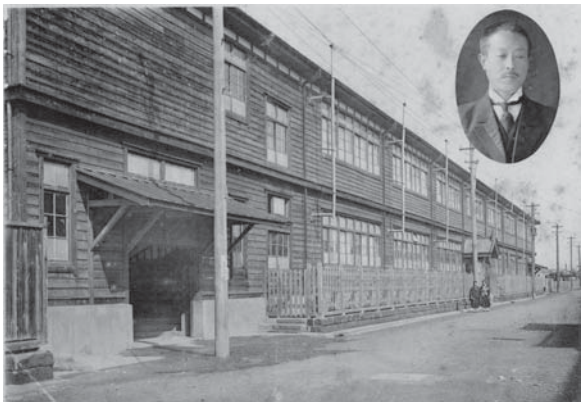
二、写真資料から見える学校の姿

（一）校舎の変遷

まずは学校生活の基本舞台となる校舎の変遷から整理する。開校当時の校舎は工費一五万一九〇〇円で建てられたコの字型の木造二階建てで、教室数は二二であった【写真1】。しかし関東大震災で倒壊し、理科室から発火して三〇分ほどで灰燼に帰したという（『教育研究紀要特別号（第二号）震災と教育』、横浜市教育研究会、一七四～一七五頁）。

震災によって市内の学校は一斉休校となるが、岡野小は一〇月一一日に近隣の西平沼小学校に残存した五教室で他校の生徒と共に授業を再開した。また一一月一〇日には旧校舎の焼跡に三六のテントを張って学校単位の授業を開始した（『開校三周年』、一九二三年、岡野小学校資料四）【写真2】。そして一九二四年一月二二日にはバラックの仮校舎として二棟十四教室を建て、二二学級での授業を再開した【写真3】。この時は「天幕教室に比すれば手足も思うように伸び呼吸も自由になし得るが如く感じでいひ知れぬ喜びに満た」という（『開校四周年』、一九二四年、岡野小学校資料五）。

その後、横浜では復興校舎の建築が進み、岡野小学校では一九二八年一二月二五日に鉄筋三階建二五教室の校舎が竣工した。生徒と教員は翌二九年二月五日に新校舎へ移り、五月八日には祝賀式が挙行された（『開校第九周年』、一九二九年、岡野小学校資料一〇）【写真4】。岡野小学校の写真資料は、このうちバラックの仮校舎と復興校舎のものが多くを占めている。



【写真1】初代の木造校舎（1921年）
教育・学校資料写真002-002

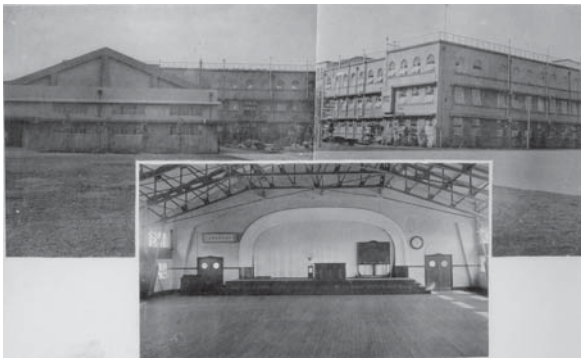
【写真2】震災直後の天幕授業（1923年）
教育・学校資料写真001-004

【写真3】天幕後のバラック校舎（1924年）
教育・学校資料写真001-003

（二）集合写真からみえる時代像

岡野小学校写真資料の大半は、生徒と教師が整列して正面を向く集合写真である。四三件の写真資料のうち二八件に集合写真があり、その数は四一九枚と全体の七割を占めている。これらの集合写真からは何を読み取ることが可能だろうか。簡単に紹介しておこう。

集合写真の典型は校舎の前で学級毎に撮影した写真であり、ここからは各学年の学級数や生徒数、生徒達の服装の推移をうかがうことができる。例えば一九二五年六月の写真帳（岡野小学校資料三五）には合計二六学級の集合写真が載っているが、当時の校舎の教室数は十四であった。このように当時の横浜の学校は就学児童の学級数に対して教室数が慢性的に不足しており、授業数の少ない低学年の学級を午前と午後にわけ、教室を二学級で使用する二部授業が広範に行われていた。岡野小学校では新校舎建築後も教室不足は解消されず、少なくとも一九三九年ま



【写真4】復興校舎の全景と講堂（1931年）
教育・学校資料写真014-002

【写真5】卒業記念写真　尋常六年三組（1921年）
教育・学校資料写真002-007

では二部授業が続いたことが確認される（『開校第十九周年』、一九三九年、岡野小学校資料一八）。

また一九二一年の尋常六年の卒業記念写真【写真5】では生徒達の姿は基本的に和装だが、一九四〇年撮影の尋常六年の卒業記念写真【写真6】ではほぼ全員が洋装となっている。このように一九二〇年代から三〇年代にかけては、横浜の子ども達の服装が和装から洋装へと転換していく過渡期として位置づけられている（『横浜市史Ⅱ』第一巻上、一二五四～五五頁）。各学校が毎年学年・学級別に撮影してきた集合写真は、こうした推移を視覚的にたどりうる歴史資料としての意味を宿しているといえよう。

集合写真にはこの他にも学校のさまざまな行事の記念として撮影されたものがある。例えば、本牧海岸で行われた海水浴【写真7】、卒業記念旅行としての記念館三笠での集合写真【写真8】、身体の弱い生徒を対象とした夏期養護学級【写真9】、「皇軍兵士の武運長久祈願」を目的とした浅間神社での参拝【写真10】などがその典型といえる。このように、学校の集合写真は日常の学校風景や生徒の生活世界というよりは、記念すべき行事のあるたびに撮影された資料とみることができるだろう。

（三）さまざまな学校行事

集合写真以外にも、さまざまな行事の写真がある。特に目を引くのが運動会・体育授業・水泳等の体育関係行事であり、岡野小学校写真資料からは一九件一〇六枚の写真を確認できる。

例えば【写真11】は、岡野公園を会場として実施された一九三〇年の大運動会の風景であり、生徒達が運動場に整列し、集団で体操をしている。

また【写真12】は、一九三三年の大運動会である。この年の運動会は神奈川県立横浜高等女学校校庭で開催され、尋常四年女子の競技「達磨送り」が行われている。いずれの写真も体操や競技に励む生徒の姿を保護者や地域の人々が遠巻きに観ている。運動会が学校と地域との交流の場として重きをなしてきたことをあらためて認識させられる写真である。

一方、運動会ほど数は多くないが、文化関係の行事も確認することができる。

【写真13】は、一九三〇年三月の学芸会であり、講堂の舞台で女子生徒達が踊る姿を撮影している。この年の学芸会は、午前は学校児童、午後は一般父兄のために開催され「盛会を呈した」という。学芸会は毎年三月の恒例行事であった。

【写真14】は、一九三〇年一一月に開催された「創立十周年記念展覧会」

【写真6】卒業記念写真　尋常六年五組（1940年）
教育・学校資料写真023-008

【写真7】本牧海岸における海水浴（1929年）
教育・学校資料写真001-040

【写真8】卒業記念旅行（1931年）
教育・学校資料写真014-008

【写真9】夏期養護学級（1933年）
教育・学校資料写真016-001

【写真10】浅間神社での武運長久祈願参拝（1940年）
教育・学校資料写真023-010

【写真11】岡野小学校大運動会（1930年）
教育・学校資料写真010-034

である。会場となった教室内には生徒による絵画や裁縫、歴史年表などの作品がずらりと展示されている。岡野小学校はこの年の二月に「全国小学児童図画展覧会」を主催して各県の児童作品を集めて展示するなど、図画教育に力を入れていたようである（『横浜貿易新報』一九三〇年二月二五日）。しかし、各教科の教育実践に関わる写真は少なく、特に学校生活の基本となる教室での授業風景の写真はほとんどない。その中で【写真15】は授業中の様子をとらえた貴重な写真である。男子生徒の風貌から尋常六年か高等科の授業とみられ、黒板に「比重◎水中にて□るくなる」とあるので理科に関する授業と推定される。

他方、写真にはあまり残らない学校の実践にも注意が必要である。その一例として学校衛生の実践を紹介しよう。都市化が進み、非衛生的な生活環境のなかで暮らす子ども達の健全な発達をいかにして確保することができるのか。この都市衛生教育の問題は当時の横浜において重要な課題となっていた（『横浜市史Ⅱ』第一巻上、一二一七～二七頁）。こうしたなかで、岡野小学校は鉄筋校舎における学校衛生の取組みで注目される学校となり、生徒の履物と校舎の清潔保持の関係、教室の二酸化炭素濃度の計測と換気、生徒の検温、病欠児童の調査などを実施している。また入浴頻度が「十五日に一度以下」の生徒が九四名（全体の五％）も居たことから学区内の味噌醸造工場にある風呂の提供を受けて「学校入浴」を実施したり、夏休み中の健康保持のために早起会やラジオ体操を企画するなど、生徒の健全な成長をはかる活動を展開していた（岡野小学校『本校衛生上の諸問題』、一九三三年、安室吉弥家資料九九四）。【写真9】で紹介した夏期養護学級も、この衛生教育の一環としての行事であった。夏休みに体質の良くない生徒を集め、講堂や運動場、学区内の森林地で日光浴や散策、昼食・午睡・間食などを共にすることで彼等の健康増進をはかろうとしたのである。

【写真12】岡野小学校大運動会（1933年）
教育・学校資料写真017-007

【写真13】学芸会（1930年）
教育・学校資料写真010-031

おわりに

今回は岡野小学校写真資料の代表的な写真をとりあげ、その内容を整理した。この作業を通して、一つの学校・学年・学級の経験はそれぞれ固有のものでありながら、同時に学校や地域、横浜市の時代経験とも共通する側面を持つことが見えてきた。今後とも資料に宿る個別性と時代性を前提に、より多くの写真資料を集積していきたい。また個人情報やプライバシーには十分に配慮しつつ、可能な所から公開していくことにしたい。

〔金耿昊〕

【写真14】創立十周年記念展覧会（1930年）
教育・学校資料写真010-039

【写真15】授業風景（年不詳、1929～1931年）
教育・学校資料写真001-079

続・戦後の風景

前回、戦後横浜の風景写真から、中区を中心に紹介した。今回は、主に西区の戦後の風景を見ていく。

当横浜市史資料室が所蔵、あるいは提供を受けている写真は、関内・関外など中区域のものが多く、中心市街ではあるが西区や神奈川区、それに鶴見区などの写真は少ない。西区域の写真は、その中でも比較的多い方だが、関内・関外のように目印になる建物や風景が写り込んだ写真が少なく、場所の特定がより困難であった。前回述べたように、集中して調査した結果を展示で紹介すると共に、以下主な写真について解説していく。

野毛山周辺

はじめに、前回も紹介した、庄司幸一氏が伊勢佐木町の湘南百貨店から撮影したと思われる風景を見てみる。写真①は、野毛山方面を望んでいる。京浜急行線の高架が左右に横切り、その手前には中区の末吉町一丁目の街並みが写っている。いくつか看板が見える。拡大してみると、弥生旅館（中央手前）や太田なわのれん（右手）などが確認できる。左手奥に向かって伸びる道路の、高架の手前に黄金橋がある。家並みの影になっているが、この黄金橋の左右に大岡川が流れる。

川の向こうまでが中区であるが、先ほどの道路の先にある建物は東小学校で、このあたりから西区となる。その奥、丘の頂上付近は野毛山公園で、遊園地の遊具類が見える。やや右、中央寄りには野毛山プールの観覧席が確認できる。その左手前の屋根には、野沢屋の文字が読み取れる。『中区明細地図昭和三一年版』（経済地図社、一九五六年）によれば、野沢屋葬祭部があった。

写真①　伊勢佐木町から見た野毛山方面　1953年7月16日
荘司幸一氏撮影

野毛山周辺の写真を、続けて紹介する。野毛坂を登り、野毛坂交差点を越えると、左に市立図書館、正面突き当たりに老松中学校があり、右手にかつて野毛山ホテルがあった。写真②が、一九五二（昭和二七）年に庄司幸一氏が撮影した野毛山ホテルである。現在は、マンションになっている。坂はこのあたりで左に折れて、少し登ると右手は野毛山公園、左に市長公舎がある。写真②にも満開の桜が写っているが、野毛山公園内は今も桜の名所である。野毛山には当時、個人の邸宅や会社の寮、旅館が多くあったようだ。

写真②　野毛山ホテル　1952年4月10日　荘司幸一氏撮影

さらに坂を登っていくと、そのまま進むと動物園、左に曲がると遊園地・プール方面に向かう十字路に至る。写真③は、左下が野毛坂方向、右奥が動物園と思われる。これは、須田宏氏提供で、庄司氏撮影と同じ一九五二年の写真である。以下、しばらく須田宏氏提供写真から、野毛山周辺と平沼方面の写真を紹介しよう。写真には撮影場所の説明と年代の情報が記されているものもあり、いずれも一九五二年から一九五五年頃の撮影と思われる。

十字路の先、動物園入口を過ぎると、右に藤棚方面に向かう道がある。西谷浄水場と野毛配水池を結ぶ水道道である。水道管を敷設するためできるだけ直線で道路をつくったため、藤棚と野毛山の間はとくに起伏が激しく、通称尻こすり坂とも呼ばれる傾斜のきつい坂が続く。その尻こすり坂を自動車が、土埃を上げながら登ってくる様子をとらえたのが、写真④である。奥が野毛山方面、動物園あたりだろう。

写真⑤は、ほぼ同じあたりから撮影した現況である。この坂の途中に、西区役所が設置した水道道と尻こすり坂に関する解説板がある。

写真③　野毛山動物園前の十字路　1952年5月　須田宏家資料

紅葉坂から掃部山

一方、紅葉坂方面に転じて、桜木町から紅葉坂を登り始めると、すぐに左

に伊勢山皇大神宮に向かう道がある。その道の途中に、紅葉坂教会がある。写真⑥の中央三角屋根の建物がその教会、右手前は横浜市婦人会館である。奥が桜木町方面、背後に伊勢山皇大神宮がある。同教会は同じ場所に今もあるが、建物は建て替えられている。

写真④　水道道の急坂　西戸部町1丁目付近　年不詳
須田宏家資料

写真⑤　水道道の急坂現況　2020年9月
筆者撮影

紅葉坂をそのままっすぐ登ると、右に県立図書館があり、その奥に掃部山公園がある。写真⑧が公園内の様子で、写真⑨は公園内にある井伊掃部頭銅像の台座である。銅像は戦時中に金属回収で撤去され、一九五四年に再建されるので、この頃はまだ銅像はなかったのだろう。

掃部山公園や県立音楽堂の下、花咲町側には割烹旅館紅葉閣があった。写真⑦の右奥に写り込む建物が紅葉閣で、城のような建物が特徴だった。このあたりは、料亭が多く建ち並ぶ一画であった。また、紅葉閣の敷地内には、戦後進駐軍向けのキャバレーとしてサクラポートが開場した。

一九四六年一月一四日から一九日の『神奈川新聞』に、「進駐軍社交場　近日開場」「ダンサー　五〇〇名急募」「他に　将校倶楽部ダンサー　百名」というサクラポートの募集広告が、連日掲載された。この直後に開場したと思われるが、占領軍の進駐から四ヶ月という早さと、五〇〇人・一〇〇人という募集人数の多さが注目される。

このサクラポートでは、翌一九四七年に開催された貿易復興祭初日の八月一五日に、祝賀式典が行われている。貿易復興祭は、民間貿易再開を記念して横浜市と神奈川新聞社共催で開催され、仮装行列や女子野球大会など様々な関連行事も行われた。また、一九五三年に横浜ペンクラブが結成される際には、七月一三日の結成式をサクラポートで開催し、当初事務所も置かれている。進駐軍向けのキャバレーから出発して、戦後復興に関わる行事の会場、さらに文化活動の拠点になっていった

写真⑥　伊勢山皇大神宮に向かう道　中央に紅葉坂教会　年不詳　須田宏家資料

写真⑦　花咲町の料亭街と旅館紅葉閣（奥）
年不詳　須田宏家資料

写真⑧　掃部山公園　1952年頃　須田宏家資料

写真⑨　掃部山公園内の井伊掃部頭銅像台座　年不詳
須田宏家資料

のである。なお、一九五三年頃には、店名の表記は「さくらポート」と改められている。

さらに、掃部山公園の隣御所山町の高台から戸部本町・平沼方面を望んでいるのが、写真⑩である。左手の高架が京浜急行線、電車が停車しているのは戸部駅である。戸部駅の奥に、平沼小学校がある。中央の建物は、向かって右側が戸部警察署、左側が西消防署で望楼が建っている。その奥を、右に向かって京浜急行線の高架が続く。

写真⑩　御所山から戸部本町・平沼方面を望む　年不詳
須田宏家資料

高島町から平沼方面

戸部警察署・西消防署の裏手に、石崎川が流れている。写真⑪がその石崎川で、説明によると砂利の荷上場とされている。製材所のものであろう材木が、沢山浮かんでいる。高架は京浜急行線、奥の橋は平戸橋だと思われる。中央奥に並ぶ家は、市営住宅とされている。このような中小河川が、当時はまだ舟運の機能を果たし、また貯木場としても利用されていた。

写真⑪　石崎川　高架は京浜急行線　年不詳
須田宏家資料

石崎川は、高島町付近で桜川に合流する。桜川の桜木町側は、この頃から埋め立てられるが、高島町から横浜駅手前までは今も残っている。写真⑫は、横浜駅近くの浅山橋から高島町方向に桜川を見ている。左の建物は東京電力、石崎川と同じく材木が沢山ある。海の干満の影響を受けるのか、水位が下がって材木は底に並んだ状態である。

石崎川の先は、平沼町・西平沼町方面となり、帷子川が流れている。須田宏氏提供写真には、この帷子川と東海道線に架かる平沼橋から周囲を撮影した写真が数枚含まれる。鉄道と踏切を写した写真⑬は、平沼橋から南側の東海道線・相鉄線を見下ろしている。右手奥に見えるプラットホームは相鉄線平沼橋駅で、さらにその奥には東京ガスのガスタンクがある。踏切は、今は廃止されたが、かつては開かずの踏切ともいわれた。

写真⑫　桜川　奥が高島町　年不詳　須田宏家資料

平沼橋は、関東大震災後の復興事業の一つとして、帷子川と東海道線を渡る高架橋として新たに建設された。このとき、高島町から浅間町に至る道路も同時に整備され、石崎川を渡る高島橋もできた。復興局、すなわち国施工で一九二七（昭和二）年から工事が始まり、一九二九年に完成した。二月二二日には地元平沼町で、平沼橋・高島橋および道路の開通式が開催された（『横浜貿易新報』二月二三日）。堀切善次郎復興局長官、池田宏神奈川県知事の他横浜市の関係者が参列し、式のあと両方の橋の渡り初めを行った。

それまで、帷子川に架かっていた橋は元平沼橋となった。先の踏切はこの元平沼橋に続く横浜道の一部だった。しかし、この写真の後、高度経済成長期以降は電車の本数が増加したこともあり、踏切の開く時間が極端に短くなり、開かずの踏切となった。その後、平沼橋が掛け替えられ、歩行者用エレベーターが設置され、さらに元平沼橋も掛け替えられて、踏切は廃止されるに至ったのである。今は失われた風景の写真から、こうした歴史の経緯を振り返ることができる。

平沼橋をさらに進んで、やはり南側を望むと写真⑭のような風景となる。左端に、平沼橋駅のプラットホームが見える。その右奥に東京ガスのガスタンク、手前の白っぽい建物は横浜製糖工場であろう。右手帷子川の奥に架かる橋は、平岡橋である。さらに、帷子川を渡って対岸から振り返ると写真⑮のようにガスタンクが見える。

帷子川の上からは、下に元平沼橋が見える（写真⑯）。撮影時期や時間が異なるためか、帷子川の水位が大きく下がっている。橋を渡るリアカーは、提供者によれば銭湯のものだろうという。この付近に多くあった製材所に、おが屑や木っ端をもらいに行ったので

はないかというのである。

失われる風景

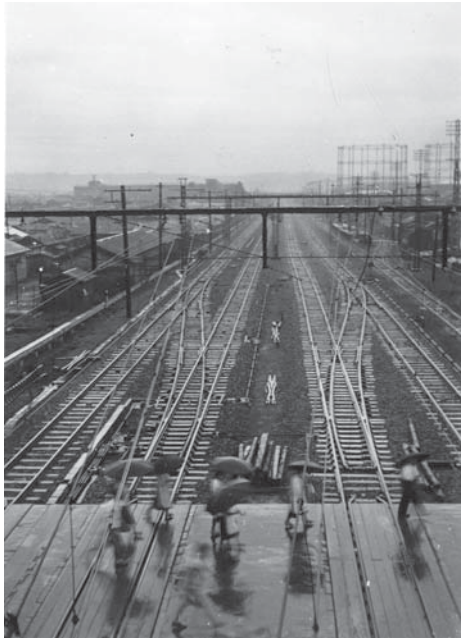
銭湯は、現在では失われつつある風景である。最後に今ではほとんど見られない街頭の風景を、いくつか紹介したい。いずれも、秋場英氏撮影の写真である。秋場英氏は戦後米軍に勤めた後、南区真金町で写真店を営み、自らも市内の街角で写真を撮っていた。一九五五年前後の写真が多い。

写真⑰は、ちんどん屋である。店などの広告宣伝としては、高度経済成長期以降衰退するが、現在もパフォーマンス・大道芸の一つとしてイベントなどで披露されることもある。

やはり大道芸の一つに、猿回しがある。猿回しの廻りに集まる人々をとらえたのが、写真⑱である。この写真の他、一〇枚以上連続で撮影されているのは、それだけ人々の表情に引かれたのだろう。背景に写る寿司屋から、場所は南区永楽町一丁目の空地と特定でき、期日も一九五六年五月三日と記録されている。子供が多いが、大人も交じっている。なかには赤ん坊を背負った女の子もいる。大道芸としてはすでに衰退していたので、当時としても珍しかったのか、子供も大人も興味津々といった表情である。

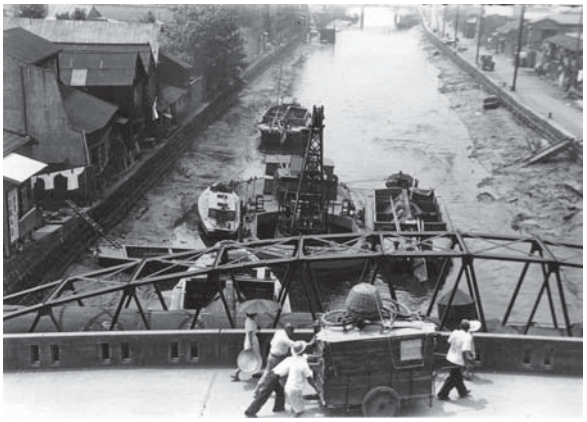
戦後復興期の街の風景は、今は多くが失われたが、焼け跡からの復興と人々の暮らしの再建の息吹を、そこに見ることができる。

（羽田博昭）



写真⑬　平沼踏切　東海道線と相鉄線　右奥に平沼橋駅　年不詳　須田宏家資料

写真⑭　帷子川と横浜製糖、ガスタンク　年不詳　須田宏家資料



写真⑯　平沼橋から見た元平沼橋と帷子川　年不詳　須田宏家資料

写真⑮　帷子川　左奥にガスタンク　年不詳　須田宏家資料

写真⑰　ちんどん屋　年不詳　秋場英氏撮影

写真⑱　猿回しの見物に集まる人々　1956年5月3日　秋場英氏撮影

一九一六年、山室周作家のナス生産と出荷

本年度の展示会として、現在の神奈川区六角橋地区が、大正期から昭和期にかけて急速に宅地化していく様子を、地元の名望家である山室家の資料（山室宗作家資料）を使って展示を行った。関連講座として、昨年度の市史資料室紀要を元に展示前半部の内容にあたる大正初期の農業について行ったが、キュウリ・ナスの生産・出荷の状況等、紀要・展示でも触れていない内容もあった。そのうちから一九一六（大正五）年のナスの生産と出荷について補遺として述べておこう。

一九一六年の野菜生産の概要

先ず、簡単に一六年における山室家の野菜生産について述べておこう。

この時期の山室家では、都市近郊農村の特徴である野菜生産が盛んに行われており、金銭収入の約五割が野菜・イモ類の販売収入であった。これらと米麦雑穀や林産品などで金銭収入の約八割を占めており、農業を主としている家であったと言える。一方で地代・家賃が二割前後あり、村内外に農地以外の土地所有もある都市近郊の農家・地主であった。

山室家の野菜類の生産は多種類あり、同年の日記等には、イモ類も含み二五種類の野菜類が登場する。このうち、販売回数でみると、ナスが八七回と圧倒的に多く、以下コマツナ二四回、ジャガイモ二三回、キュウリ二〇回、コカブ一九回などとなっている。出荷回数では数量や金額の比較はできないが、これらの出荷回数が多い野菜類が栽培の主力であったとは言えよう。出荷先別の回数で見ると四・五・六月に出荷が多いが、年間を通して毎月何らかの野菜の出荷をしていた。このうち、冬季には促成栽培が行われていた。

促成栽培について

山室家の具体的な促成栽培を見る前に、簡単にこの時期の促成栽培について見ておこう。

促成栽培は、加温・保温により通常より前に収穫期をずらす方法で、生産地にとっては最盛期の価格下落を避けることによって収入を上げ、消費地では長い期間にわたって入手できるようになるメリットがあった。既に江戸時代の都市近郊などで行われており、江戸近郊の南葛飾郡砂村（現江東区）などが有名で、初鰹など「初物」・「走物」を珍重する嗜好と相まってかなり高価に販売されていたという。

明治時代には、図1にあるようなガラス障子を上に設置して保温する木框を使用し、土の中には馬糞や下肥などを使った醸熱物を踏み込み、その発酵熱によって加温した。図の木框は、奥行き約一・二メートル、正面幅約三・六メートル、厚さ二・四～三センチメートル板を使い、前面の高さは約三〇～四五センチメートル、後ろ側は四五～六〇センチメートル、角材で足を設置している。下図のように地面を掘って設置し、落葉を底に入れ、上に醸熱物を踏み込み、埴土を乗せている。また、周囲に風除け等のために垣を設置した。この框に種を播いて苗を育て、何回か移植し、最後の移植（定植・本植）の後、開花・結実・収穫となる。また露地物も、苗床として框を使用していた。山室家でも、日記に記載されている框製造等を見ると、これと同様の框を使用していたと思われる。

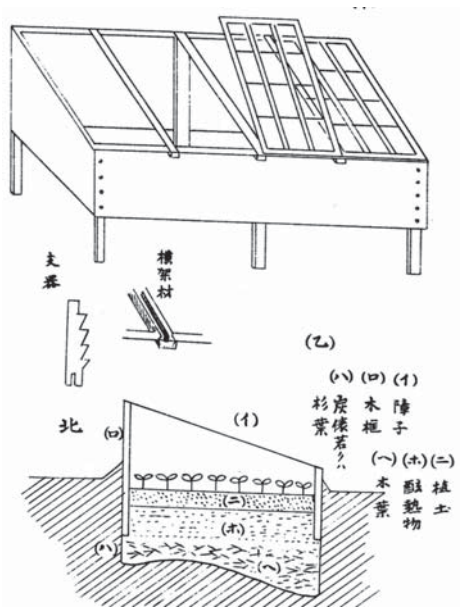


図1　促成栽培の木框（『園芸の栞』神奈川県立農事試験場、1912年、安室吉弥家資料1293）

一九一六年のナス促成栽培

次に具体的に山室家のナス生産について、山室宗作家資料「大正五年　当用日記」（家政―日記・手帳一七）と「大正四年度　金銭出納簿」（家政―金銭出納二）により一六年を例に見ていく。

先ず、促成栽培についてみていこう。同年のナスの記載は一月一三日が最初で「茄子本葉一葉ニナル」とあり、前年に框に種を播いたものが育っている様子が書かれている。前年の日記は欠なので、いつ播種されたか分からないが、翌一七年では一二月一〇日に浸種の記載があり、この翌日か翌々日には播種されたと思われるので、一五年も同様に一二月中旬に播種されたと思われる。

次いで一九日には第一回の移植を行い、二月九日には「本葉三四葉」で第二回の移植、一三日には「本葉四五葉」となり、二四日には第三回の移植を行っている。また三月八日にも移植とあり、遅れていたものか、次の播種のものかは分からない。

四月四日には「小指位ノ二三成果」とあり、一〇日には「小指大ノ成リ付ク、花盛リ」で「促成踏込ム、茄子定植用」と定植用の框を準備している。

一方で翌一一日には「胡瓜十三本、茄子五個、八百権へ始メ」とあり、五個を収穫し出荷している。前日のものでは早すぎると思われるが、詳細な記載が無く不明である。一九一三（大正

二）年では定植の記載が二週間ぐらいの間に何回か出てきており、また丸ナスと長ナスが出てきているので品種の違いなども関係しているようである。

四月の中旬以降は収穫と出荷の時期となる。図2は一六年のナスの出荷数量と単価を見たものだが、「初物」・「走物」の時期である四月中の出荷数量は、一日ほぼ一〇個未満と少なく、その後、五月上旬には二～三〇個から五〇個程となり、中旬から六月初旬は一〇〇個から二〇〇個前後となっている。

日記等で単価が分かる最初の四月二七日には、四個で四四銭の収入があり一個一一銭であった。二九日には六銭五毛（四四個）、五月一一日五銭八厘六毛（一〇五個）、一三日六銭九厘（八六個）、一七日七銭五厘五毛（三〇八個）、一九日六銭九厘二毛（二四〇個）、二一日七銭四厘八毛（二〇〇個）、二三日六銭八厘九毛（三三八個）、二五日六銭一厘八毛（二九〇個）、二七日五銭四厘（二四〇個）、二九日四銭七厘三毛（二六二個）と、五月一一日以降、一五日・三一日も日記には出荷の記載があるので一日おきに出荷しており、単価は五～六銭ぐらいであった。五月一九日の日記の記載には「上物ハ壱個十二銭位、込ノ七銭位」とあり、二九日にも「上物ハ一個拾一銭也、平均五銭也」とあるので、質が良いものは一一～一二銭ぐらいであった。六月初旬もほぼ一日おきに出荷しているが、単価は五月の半値ほどになり、「上物ハ壱個五銭、平均壱個参銭也」と上物とともに半値となった。これは、漸次、露地物が出荷されるシーズンとなり、全体の供給量が多くなったためと思われる。一四・一六・一八日は、後述のように促成物と露地物の収穫が分けて書かれており、その後は促成物との記載は無くなるので、六月二〇日前後が促成物出荷の最後となった。

一九一六年のナス露地栽培

次に、促成栽培の時期と重なっているので判別しないところもあるが、露地物についてみていこう。

三月八日に本農園から種子一合を購入し、翌々日には「露地茄子苗用浸種」を行っている。記載は無いが、数日の内に播種が行われたのであろう。

四月四日には「本葉一葉」とあり、促成物が花盛りであった一〇日には、「本葉弐参葉」となっており、翌一一日には第一回の移植を行っている。

その後は促成物の出荷期となり、そちらの記載が多く露地物の記載は少ないが、五月八日から定植を行っている。八日には一二〇〇本、一反二畝分を行い、一一日には一〇〇〇本、一二日には一二〇〇本を行い、「合計三千六百本」と記載され、一三日には「茄子定植、本日ニテ終了」とあり、四七〇〇本を定植したと記載されている。一方、余った苗なのか一〇〇本の苗を五〇銭で売却している。二九日にも一五〇本の定植を行っている。

三〇日には数本が開花を始めており、六月二日には三〇〇本が開花し、翌三日には蚜虫（アブラムシ）の駆除を行っている。

一〇日には「来ル十二日頃ヨリ露地茄子採集始マルベシ」と記載し、一四日には「畑ノ茄子、六十一個　四十八銭六厘、畑ハ一昨日拾五個也ニテ二回」とあるので、一二日に一五個の収穫が露地物の最初であった。一四日には促成物も二〇七個の収穫があり、単価は七厘二毛、露地物単価八厘と変わらない価格となっていた。一六日には露地物四〇〇個、促成物二六〇個となり、一八日は露地物六八二、促成物二〇〇個、二〇日は収穫個数が不明だが、二二日には単に九六〇個と記載されるようになり、促成物はほとんど無くなっ

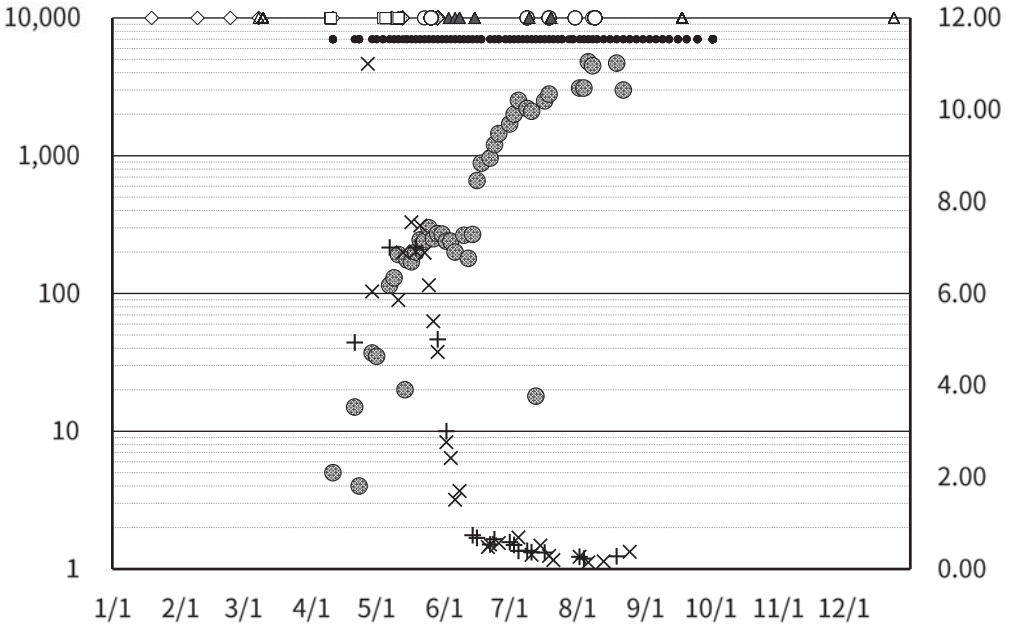


図２ 1917（大正7）年、山室家のナスの出荷量と単価
出典：山室宗作家資料「大正五年　当用日記」（家政-日記・手帳17）、「大正四年度　金銭出納簿」（家政-金銭出納2）。
注：●は出荷量（個、左軸-対数目盛）、┼は日記記載の単価（銭、右軸、計算単価を含む）、✕は金銭出納簿記載の計算単価（銭）。上部の●は出荷量の有無に関わらず出荷したと思われる日、◇等は出荷以外のナスに関する作業が記載されている日を示す。

たものと思われる。その後もほぼ一日おきに収穫・出荷され、二四日一二〇〇、二六日一三〇〇（促成物も一五〇個）、二八日は不明、七月一日一七〇〇、三日二〇〇〇個となり、五日二五二〇、七日不明、九日二二〇〇、一一日二一〇〇、一三日不明（一八籠）、一五日不明、一七日二五〇〇、一九日二八〇〇、二一・二三・二五・二八・三〇日不明と後半は個数が分からないが、七月は二〇〇〇～三〇〇〇個の間で推移し、八月二日には三一〇〇個と三〇〇〇個を超え、四日三一〇〇、六日には四八〇〇個と四〇〇〇個を超え、八日四五〇〇、一〇・一三・一六日不明、一九日には「茄子四千七百、下物四百個」と下物も合計すると数量が判明するなかで最高の数量となった。またこの頃から収穫の間隔が約二日おきとなっている。二二日三〇〇〇と下物三〇〇、二五・二八・三一・九月三・六・九・一二・一六・二〇・二五・一〇月二日不明と八月末以降は数量が判明せず、一〇月二日が収穫の記載がある最後となった。

また、八月二六日には「茄子跡耕シ」、九月二日「茄子跡耕耘」と収穫が終了した畑を次に備えて耕しており、記載は無いが別の作物のために使われたと思われ、九月二七日には草取り、一〇月二〇日には「茄子ノ樹コギ」を行い、一一月四日には「原畑」のナスの跡に大麦を播種している。

露地物の単価を見ると、六月の促成物と混在しているときでも、既に一銭を割り込み七月上旬までは五～六厘で推移し、以後八月初旬にかけては二～三厘となり、八月中旬には二厘を割り込み底値となった。

このように露地物の最盛期には、促成物最盛期の二〇倍もの収穫があったが、単価は二〇分の一以下となった。

ナスの出荷先

次にナスの出荷先を見ていこう。

表1は、山室家のナスの出荷先のうち、名前が記載されている複数回の出荷先問屋である。全部で七問屋あり、このうち備考に記載した四問屋は場所等が確認できるか、ほぼ確認できる問屋である。この他に問屋名が記載されていない不明分がかなりある。

出荷回数は㊇が一九回と多く、主に促成物の出荷時期である四～六月に集中している。しかし、記載なしの不明分が露地物の時期に集中しているので、㊇が促成物だけかどうかはよく分からない。この㊇は山室家資料に仕切が残っており、港町市場（横浜食品市場）取締役畠山国太郎の「八百友」で同市場に所在していることが分かる（真砂町一丁目四番地、『横浜社会辞彙』一九一八年）。

表1　1916（大正5）年、山室家のナスの出荷先

出荷先	回数	備考
㊇	19	八百友、港町市場（現中区港町）の問屋
下吉	9	
八百権	6	
マ	4	
林屋	4	扇町市場（現中区扇町）の問屋
八百吉	3	港町市場（現中区港町）の問屋
大安	3	神奈川町二ツ谷の問屋

出典：図2と同じ。
注：山室家が複数回出荷している問屋のみ。これ以外に1回が1問屋、市場・埋地が1回ずつ、不明が23回ある。

次に多い「下吉」・「八百権」・「マ」は所在不明で、「マ」は、一貫してこの名称で出てくるので屋号も不明である。

林屋は、資料上では所在は分からないが、おそらくは扇町市場の二問屋のうちの一軒である林屋と思われる。同市場は、市役所の建築に伴う港町市場の一時移転の騒動に関連し、県市場規則の場所制限が撤廃された際に認可となった市場である（一九〇三年）。

八百吉も資料上では所在は分からないが、先の八百友と同じ港町市場の鈴木萬次郎の問屋（真砂町一丁目四番地）と思われる。

大安は、山室周作日記に翌一七（大正六）年四月に開業式の記載があり、県規則により同年に認可された市場であるが（神奈川町二ツ谷、『横浜市統計書』第一六回）、これ以前より問屋として営業をしていた。『横浜市商工名鑑』（一九一八年）では青木町九四五、松本安蔵とある。一九二〇（大正九）年に認可青果市場八箇所が合併し横浜中央食品市場株式会社を設立、二一年から市営の横浜市中央食品市場を経営するようになるが、港町・扇町・大安の認可市場は、同社に参加することとなる。この他、市南部では長者町・蒔田町、北部では飯田町・神明町（神奈川町）、瀧下町（青木町）の各青果市場が参加した。

また、東京出荷は一六年には確認できないが、翌一七（大正六）年には、神田多町青果市場の問屋と思われる「角善」へ出荷している。同年、日記等では五月の半ばから七月初旬にかけて六回の出荷が確認でき、促成物の時期に出荷していた。七月一四日の記載には「東京角善へ行ク、勘定相済３２１０銭　八回分」とあり、記載されていない分も含めて八回の取引があったようである（「大正六年　当用日記」、山室宗作家資料　家政―日記・手帳一八）。角善には一二（大正元）年にも出荷の記載があり、「本日、神奈川便利社ヲ依頼シ冬瓜四個、角善へ送ル」とあるように、業者に依頼してトウガンを送っている（「大正元年日誌」、山室宗作家資料　家政―日記・手帳一四）。

おわりに

このように一九一六（大正五）年の山室家では、ナスの促成物・露地物やその他の多種類の野菜を生産し、そのほとんどを都市部に出荷していた。この経営は、二三（大正一二）年の関東大震災後に郊外移転が急増し急速に宅地化が進み、山室家でも宅地・貸家経営主体に舵を切るまで続いていた（『横浜市史Ⅱ』第一巻上）。

（百瀬　敏夫）

「広報課写真資料目録」のWeb公開

広報課写真資料は、二〇〇七（平成一九）年度、市民活力推進局広報課が中区万代町の教育文化センターの分室を撤収する際に移管された資料であり、既に本誌第四号で紹介した。この際に同課が主要な写真約一万点をデジタルデータ化したものも移管されている。これらの写真は、市史資料室の事業などで使われている他、外部提供ができる写真については出版物や展示・テレビ番組等に提供する業務を行っている。

移管当初は外部用目録がなく、資料室の発行物により写真を特定するしかなかったが、その後、三五ミリフィルムのべた焼き程度に出力した目録を作成し資料室に架蔵している。

本年九月よりは、この紙目録を作成した際のデータをもとに、市史資料室のWebに目録（PDF）を公開している。

「広報課写真資料目録」のp251

◇目録の場所

横浜市のトップページ→市の情報・計画→横浜市について→市の概要→横浜市史資料室→「写真で見る昭和の横浜」等のご案内→広報課写真資料の紹介

◇アドレス

https://www.city.yokohama.lg.jp/city-info/yokohamashi/gaiyo/shishiryo/showa/shokai/

目録は、都合上、写真を横長と縦長に分けて作成し、日付順に配置してある。横長写真分はファイルを三分割しており、「広報課写真資料の紹介」下の「広報課写真資料とは」にある目次から該当年のページを探し、分割ファイルにあたることが便利である。ファイルサイズが大きいので、ダウンロードに時間を要することもある。

なお、他の資料群の写真も含めて原資料による閲覧はお断りしており、また、放映・掲載等を前提としない写真利用にはデータ提供はしていない。写真資料の出版物への掲載・放映等による利用については、「横浜市史資料室のご利用について」にある手順により申請が必要である。また提供データの受け渡しには、CD－Rをご持参の上、資料室においでいただく必要があることも従来通りである。

（百瀬　敏夫）

《市史資料室たより》

【令和２年度横浜市史資料室室内展示】

「YOKOHAMA 戦後の風景」

会期：開催中～令和３年1/11（月・祝）

時間：午前９時30分～午後５時

◎入場無料

会場：横浜市西区老松町１番地
横浜市中央図書館地下１階
横浜市史資料室

内容：戦後から高度経済成長期前までの中区、西区を中心とした風景を所蔵資料で紹介します。

◎予告　次回市史資料室室内展示

大正後期～昭和前期　学校写真の世界

会期：令和３年１月中旬～４月初旬

【展示会「神奈川区六角橋、農村から街へ～山室周作日記に見る移り変わり～」が終了しました。】

①展示会（8/22～10/10）

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、名前、連絡先、体調の確認を行って見学することになり、例年とは違う展示風景となりました。地元の歴史を知りたいと神奈川区在住の方が多く来室されました。時間をかけてじっくり展示見学される様子からは、わがまち六角橋に対する熱い思いが感じとられました。

②展示関連講座（9/26）

「山室周作日記にみる大正初期の農業」

参加人数を少なくして、横浜市中央図書館地下１階のホールで開催されました。「大正期橘樹郡等の農業による暮らしぶりを詳細につづった山室周作日記は貴重な足跡だ」、「蔬菜生産の様子がよくわかりました」等感想を頂きました。

【寄贈資料】

1 田中一郎　様　　2点
田中一郎家資料追加

2 白石　緑　様　　3点
小林直明家資料追加

3 ダン・陽子　様　　1件
1945年５月29日横浜大空襲手記

4 高橋富美子　様　　82件
高橋富美子家資料追加

【横浜市史資料室のご利用について】

現在横浜市史資料室の利用は、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため予約制となっております。事前に電話・Eメールで利用方法等をご相談ください。

横浜市史資料室
電話：045-251-3260
Fax：045-251-7321
Eメール：so-sisiriyou @city.yokohama.jp

◇ 休 室 日 の ご 案 内 ◇
毎週日曜日及び
横浜市中央図書館休館日

◆『市史通信』の編集は、公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団　近現代歴史資料課　市史資料室担当職員が行っています。
リサイクル適性の表示：紙へリサイクル可